

めずらこども園「優秀園実践提案研究会」 開催レポート

2021年11月20日(土)、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「優秀園」を受賞しためずらこども園による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoomウェビナーによるオンラインで実施しました。全国の認定こども園・幼稚園・保育所・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約90名(端末数)の参加がありました。以下にめずらこども園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：令和3年11月20日(土) 9:30～11:30
2. 主催：社会福祉法人芽豆羅の里 幼保連携型認定こども園 めずらこども園
3. 共催：公益財団法人 ソニー教育財団
4. 主題：「科学する心を育てる」主体的な遊びからはじまる探求活動
5. プログラム
 - 1) 開会式・実践発表 9:30～10:05
 - 2) 協議会(質疑応答) 10:05～10:10
 - 3) 記念講演 10:20～11:20
演題：「主体的な遊びと探求活動を支える保育者」
講師：広島大学大学院教授 中坪史典氏
 - 4) 閉会式 11:25～11:30

実践発表 研究主題：主体的な遊びからはじまる探求活動

本園は、子どもが自ら周りの環境に「素直に感じる心」で関わり、興味・関心を広げ、様々な体験活動や遊びの中で不思議を感じ、探求サイクルを繰り返し、経験を重ねて、自然への親しみや愛着を深めていくと考える。さらに、友達との協働的な学びにより「科学する心」が育ち合うと思われる。

2020年度は、子どもたちの日々の遊びの中は、驚きと発見、発見の裏には数えきれないほどの失敗があり、そこを面白く、夢中になって通り過ぎ成長する。子どもたちが主体的に遊びを展開し、失敗を基に探求を進め「試行錯誤」と「創意工夫」を繰り返しながら、環境に関わり遊びを創り出していく子どもたちの気付きや工夫がどのように変容し「科学する心」が育まれていくかを分析した。

〈2歳児〉

今まで見てきた飛行機雲と幅の違いに気付いたり、雲が風に乗って動いている様子に不思議さを感じたりして、毎日の生活の中に当たり前にある空に興味や関



心が広がり、じっくり観察したり発見を楽しんだりする姿を捉え、写真やカードを準備して可視化し、クラスで共有しやすくすることで子どもたち主体の対話や探求が広がっていったと考える。

〈3 歳児〉

水遊びの中で、手に持った石が濡れると色が変わることに驚き、疑問や考えたことを試していく中で、色の変化や石の表面の違いに気付き、友達との関わりによって広がり、発見を伝え合うことで新たな気付きへと繋がっていった。面白い遊びが広がり、“やってみたい”を実現し探求することで、主体的な遊びを通じた発見を深めていくことが学びに繋がると考える。



〈4 歳児〉

クラスの中で泡への興味・関心が高まり、「泡は空気なのか、空気ではないのか。」という疑問が生まれ、友達と意見を交わしながら予想したことを試す実験が始まった。主体的に進める中で、面白さや意欲、「他の方法でやってみよう。」と試行錯誤する気持ちが出てきた。疑問を伝え合う姿が増え、泡と空気の関係について新たな視点に広がり、さらに「知りたい!」「調べたい!」という探求心が高まり、探求サイクルによる試行錯誤・創意工夫を何度も繰り返す中で、学びの獲得や新たな発見を見つけながら学びを深めることが出来、「科学する心」が育まれていると考える。



〈5 歳児〉

アサガオが上手く育たない原因を友達と話し合い、疑問を持ちながら意見を出し合い、上手くいくために改良を重ね、何度も「もう一度やってみよう!」という試みが、新たな発見にも繋がった。「どうして上手くいかなかったんだろう?」という思考、取り組んだことへの振り返り、原因になりそうなことの予想をし、試行錯誤・創意工夫を繰り返しながら、長期にわたって関わることで植物への思いやりや、アサガオを咲かせるという目標へ向けてクラス全体の意識が高まった。目標に向かって何度も挑戦し、失敗を経験しながらやり遂げようという好奇心や意欲、繰り返し試行錯誤・創意工夫することで深まった探求心、取り組んだ結果によらずとも多くの学びを得る楽しさなど、様々な気持ちを感じながら感性が育まれ、「科学する心」が育っていると考える。



協議会（質疑応答）

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料を読んでいただき、予め質問を受け付けるとともに、当日もチャットで質問を受け付けた。以下の質問について、担当者より具体事例を通して返答した。

Q 1 : 実践の中で、保育者が次の援助へ向かう時に悩みや迷いがあれば教えていただきたい。

また、どのような方法で解決していますか。

A 1 : 5歳児の実践の中でお答えします。アサガオを育てる中で様々な失敗に直面しました。大人は失敗した時に悩みや迷いを感じ、その後は失敗ないように先回りして援助をする場合が多いと思います。しかし、失敗を経験することで、その要因を子どもたち自身が様々に考えたり、比較し

たり、さらに新たなことに取り組もうとしたりと、失敗こそが子どもたちのさらなる学びに繋がっていることに気付くことが出来ました。そのことを職員内で理解・共有出来るようになってくると、「その失敗いいね!」「ナイストライ!」の声が増えると同時に、園児と共に保育者も「なぜ?」「次はこうしてみよう!」と失敗を糧に探求の気持ちが強くなっていきました。ここでの悩みや迷いは、失敗に直面したことそのものではなく、失敗したことによって高まる成功への目標に向けて、子どもたちが試行錯誤・創意工夫することが出来るような環境を構成することでした。そのために日常から職員間で語り合い、園児の考えたことを否定せず、何事も挑戦できる探求活動へ広げながら、新たな発想を探し続けられる環境を備えるよう努めました。

以下は、発表中チャットで寄せられた質問とそれに対する回答（当日未回答分）

Q 2 : 子どもが自ら学びを獲得することを大切にされていることが事例からよく分かりました。ご発表では子どもの姿はよく見えてきたのですが、要所要所で保育者がどのような関わりをしたり、環境を用意されたりしたのでしょうか。

A 2 : 主体的な遊びが広がるように、子どもたちの発見や驚きに保育者は「面白い!」「不思議!」と共感して寄り添うことを大切にしています。子どもの発見したものに関連する絵本や図鑑・コーナーを用意し、クラス全体で共有すると発見を友達に伝えたり、話し合ったりする姿が増え、興味・関心がどんどん広がっていきます。子どもの心を動かしている目線の先に何があるのかを読み取り、子どもが何をして遊びたいのかに耳を傾け、子どもと相談しながら必要なものを用意していき、さらに充実させるようにしています。

Q 3 : クラスの中で空気の探究やアサガオの探究など、中心的な探究活動をしている時、全員がそこに参加していないと想像しますが、その際、子どもたちを見ていく時どういうところを気を付けてそれぞれの探究活動を活かしていけばよいかを知りたいです。

A 3 : 目標に向かって協力するといっても参加の仕方は一つではなく、同じ遊びをしていても楽しみ方は様々です。その過程では、様々な楽しみ方や発見があり、新たな遊びや友達の関係が生まれていきます。子どもの思いも興味の持ち方も様々であり、保育者がそれぞれの思いに気付くクラスで共有していける工夫をすることで、子どもの興味・関心が広がっていきます。友達が楽しんでいる遊びへの興味の示し方は、子どもによって違うので、子どもが「やってみたい!」「知りたい!」という思いを大事にしながら、その子が選択・決定して自由に関われるようにしていくことを大切にしています。

Q 4 : 子どもたちが発見し探究活動をしていて、自分も共に探究をしていると、答えを出してくる上司がいて、ほとんどがそこで終わってしまう。今介入してほしくないと思う時に入ってくる時、どのように園内の対話をしていけばよいか途方に暮れるのですが、なにか希望をもてるヒントがあれば教えてください。

A 4 : 保育者の関係性が良好だと、子どもについて話す機会が多くなり、子ども理解が深まります。子どもに対してだけでなく、職員同士も丁寧に関わり、それぞれが取り組んでいることを認め合い、尊重し合う同僚性が大切であることを職員会議やミーティングでの対話で協働関係や理解を深めています。一人ひとりの思いが受け入れられやすい雰囲気

で対話を重ねていくとポジティブに捉えて“語り合う”習慣が生まれ、それぞれの取り組みをしていることへの共通理解が深まり、園全体での取り組みに広がっていきます。受けとりにくい言葉を投げかけられた時は、その言葉の背景にある願いは何かを探してみると多様な考えに触れる機会となり、相手の考えを受け止めながら自分の思いも伝えていくことで互いに理解が深まるのではないのでしょうか。

記念講演

中坪史典氏/広島大学大学院教授

「主体的な遊びと探求活動を支える保育者」をテーマに、4つの視点から読み解くためのレンズ(理論)を基にお話しいただき、講演内容を以下にまとめる。

1. 主体的な遊びの意味

幼児期に育みたい資質・能力の3つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」に照らし合わせながら捉えてみると、主体的な遊びと繋がっていることがよく分かり、幼児期の終わり頃には10の姿が見られるようになる。

遊びの中で育つ思考力の芽生えの発端となるのが興味・関心であり、「好奇心」「探究心」が本園の事例からいくつも垣間見える。主体的な遊びとは思考力の芽生えだけではない。主体的な遊びによって体が丈夫になったり、友達との関係が持てたり、言語力・道徳力・科学的認識が高まったりということが言われている。主体的な遊びが中心となって、子どもたちは友達同士で関わることにより、きまりに気付いていって自己を発揮したり、自己を抑制したりすることが次第に分かっていく。友達や保育者に認められることで自信になり、自分の良さに気付いていき自分らしさを培っていく。主体的な遊びがもたらしている教育的効果である。いかに幼児期に主体的に遊ぶということが大切かということが分かる。



2. 探求活動の意味

探求心を育てるために大切な要素である「子ども性(Childness)」

- ・ (大人は、いつもどこか冷めていて、なかなか夢中になれない)
でも子どもは、我を忘れて、物事に夢中になる
- ・ (大人は、ハズに構えてなんだかんだと外側から評論する)
でも子どもは、ごちゃごちゃいわずに、ともかくやってみる
- ・ (大人は、こんなこと尋ねていいのか、バカと思われないかと心配する)
でも子どもは、疑問に思ったことを率直に尋ねる

まさに幼児期は子ども性の塊。大人はかつては子ども性を持ち合わせていたが、年齢・発達が進むにつれて子ども性が失われている。だからこそ私たちは子どもに学ぶことが大切になってくる。

溢れんばかりの探求心が原動力となり、色々な遊びに夢中になって、そして失敗する。探求心の出発点となる「疑問を持つ」、疑問を持ったならば解決するために「仮説を立てて確かめる」、アイデアが閃いて次はこうしてみようという「粘り強く取り組む」この3つのキーワードを持ち、失敗の原因に気付

き、その原因を突き止めて再びやってみて成功に導く。このサイクルの中で、子どもたちが科学している。まさに研究者がやっていることである。

3. 主体的な遊びと探求活動を支える保育者

英国の研究から、質の高い保育の特徴を読み解いていく。1つは、放任ではなく保育者が主導するわけではなく、子どもが主体となる活動と保育者が誘う活動の両方が大事にされているということ。2つ目は、子どもの小集団の活動が最も多く組織されているということ。3つ目は、優しすぎず難しすぎないような挑戦的な活動に取り組むこと。高度だけど子どもたちにとっては達成可能な挑戦的な経験というのが子どものコミュニケーションやコラボレーションやクリエイティビティを促すといわれている。最近発達領域(ZPD)が大切となってくる。4つ目は、子どもの問いに「答える」のではなく「応える」存在としての保育者、つまりは子どもの問いに耳を傾けて自分も経験したことのないようなことを一緒になって経験してみる。保育者も子どもも一緒になってワクワク感を味わいながら探求していく。そういう存在の保育者が大切である。

4. 保育者の役割と専門性

大人から教えられて子どもは学ぶものではない。子ども自身がやってみて、失敗してみて、その失敗の原因を考えて、その原因を突き止めて、そして成功に導かれる。そうした時の保育者の役割というのは、「聴くことの教育学」が基本である。保育者はまず、しばらく側に立ち、子どもがすることを観察してみる。そうしてよく理解したならば、保育者が子どもに教え導く行為は、子どもを観察しないで行う教え導く行為とは全く違うものになるでしょう。そうした子ども理解から基づいて保育を計画し、それを実践し、省察・振り返ることで新たな子ども理解をさらに深めていくことになり、子どもたちの主体的な遊びや探求活動を育む上では大切になってくる。

従って、保育者の役割を考えた時に、つつい私たちは子どもに教えたくなるし、介入したくなるし、そうした介入のしすぎはともすると、子どもの主体的な遊びや探求活動を奪い去ってしまうことになってしまう。だからといって何も介入しないで、放任放牧していれば良いのかという決してそういうわけでもない。保育者は子どもたちの探求活動をより発展させるために貴重な介入の瞬間を見過ごすわけにはいかない。いつ何時どのタイミングで、どれくらい介入するのかしないのか、この見極めは困難である。だからこそ、本園が行っていたようにドキュメンテーションで記録を取る、あるいはその記録に基づいて園内研修で保育者同士で対話をする等、そうした省察・振り返りが重要になってくる。